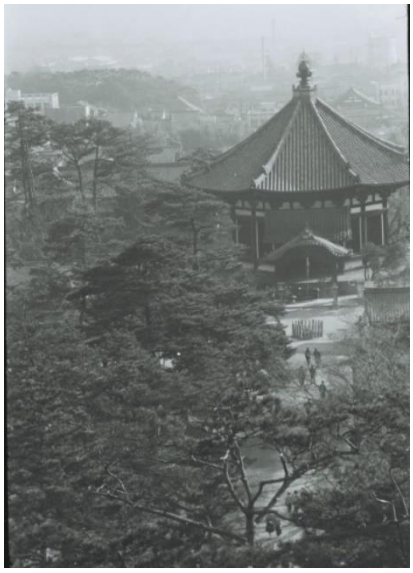
興福寺　南円堂

五重塔塔上からの風景

昭和 33 年おん祭りの日

（昭和 37 年から登昇禁止）

写真撮影：厚見昌彦氏



奈良今昔写真 WEB 蔵

月刊大和路　　ならら　2018.9 月号　当館資料 ID311295117

『いま、天平の心をつたえたい』

興福寺貫首に聞く　多川俊映さん

興福寺にとって、まさに伽藍復興と天平回帰へ向けての 30 年となった平成の時代。整備事業の最初の区切りとなる中金堂再建への思いを、興福寺貫首・多川俊映さんに聞いた。

―いよいよ落慶目前です。

平成元年に貫首に就任して、翌年ぐらいから大工の棟梁さんと再建について相談をはじめました。あれから四半世紀を過ぎ、ようやく第1期整備事業のなかの眼目である、300年ぶりの中金堂再建が成ります。奈良時代の基壇の上に建つとはいえ、建物は現代の建物であり、建設は完全なる宗教行為です。奈良県や奈良市のご指導をいただき、研究者や専門家の方々のご意見を頂戴しつつ、さらに全国の方々のお力に支えられて、興福寺自前の事業としてここまできたことに感慨を覚えますね。実りの秋になりそうです。

―回廊、南大門の基壇整備…、境内が整然としてきました。

いまでは想像しづらいと思いますが、興福寺の境内は昭和50年代前半までは畠く鬱蒼としていました。幕末に奈良奉行の川路聖謨が将来の民のためにと桜や楓を植えられた伝統もあったのでしょうが、明治期の廃仏毀釈以降、興福寺境内地は奈良公園に取り込まれ、松や桜などが密植されていきます。それは昭和になっても同じで公園的景観が勝ち過ぎ、中金堂一帯も森のようでしたね。笑い話のような話ですが、五重塔のところから参拝客の方が南円堂を指さしてこうおっしゃいました。「この五重塔は興福寺ですか。あれは何という寺ですか」。間に木があって、違うお寺に思えるほどだったんですね。逆に南円堂から五重塔を見ても塔の全容が見えず、4層や5層の甍だけが見える、そんな感じでした。境内をスカッと見通せなかったんです。また桜の木が多かったので、春先には新聞紙と一升瓶を手に花見客がどっと押し寄せるのが恒例でした。

昭和50年代後半になってようやく遺正な公園管理が行われ、奈良公園も明るくなりましたが、本来境内にはあまり木は植えないものです。貫首になって改めて境内を見渡すと、雑然としていて、建築史の本などに見る天平時代の整然とした興福寺の姿とはあまりにも落差がある。「天平回帰」を目指すならば、最も中心となる中金堂を再建しないといけない。その思いが今回の事業の原動力になりました。

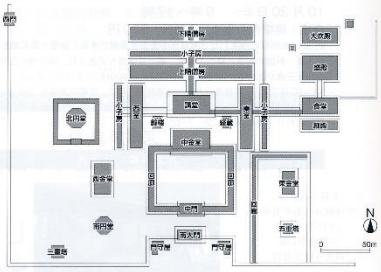
中金堂は律令制を形成され、藤原氏の基礎を築いた藤原不比等公が建てられたお堂です。再建は推定ではなく史料に基づいたもので、基本設計をしてくださった建築史の鈴木嘉吉先生も「私たちが造るのは、まさに天平の創建当初の建造物である」と、自信をもっておっしゃいます。平成の礎石の下に保護された天平の礎石、その上に焼けては建て、焼けては建てして造り続けられてきた中金堂…。それを継承できたことが嬉しいですね。

―法相柱も復興されました。

法相柱は、法相宗の祖師14人を描いた柱です。（16ページ）こうした柱があったことはわかっていましたが、当初は計画にありませんでした。しかしあるとき『造興福寺記』という記録を読み返してみましたら、内陣に入って西の第一柱を法相柱といい、最初の火事で再建したときに法相柱も復興したことが書かれていたんです。別の史料には3度目の焼失時も再興したとあります。

整備事業が進む興福寺境内。右はお披露目を待つ中金堂。奥は南円堂

五重塔から見た南円堂（昭和33年。撮影／厚見昌彦氏、提供／奈良県立図書情報館）



興福寺伽藍配置。現在中門・講堂・南大門のそれぞれの基壇も復元表示されている

―回廊、南大門の基壇整備…、境内が整然としてきました。

いまでは想像しづらいと思いますが、興福寺の境内は昭和50年代前半までは畠く鬱蒼としていました。幕末に奈良奉行の川路聖謨が将来の民のためにと桜や楓を植えられた伝統もあったのでしょうが、明治期の廃仏毀釈以降、興福寺境内地は奈良公園に取り込まれ、松や桜などが密植されていきます。それは昭和になっても同じで公園的景観が勝ち過ぎ、中金堂一帯も森のようでしたね。笑い話のような話ですが、五重塔のところから参拝客の方が南円堂を指さしてこうおっしゃいました。「この五重塔は興福寺ですか。あれは何という寺ですか」。間に木があって、違うお寺に思えるほどだったんですね。逆に南円堂から五重塔を見ても塔の全容が見えず、4層や5層の甍だけが見える、そんな感じでした。境内をスカッと見通せなかったんです。また桜の木が多かったので、春先には新聞紙と一升瓶を手に花見客がどっと押し寄せるのが恒例でした。

昭和50年代後半になってようやく遺正な公園管理が行われ、奈良公園も明るくなりましたが、本来境内にはあまり木は植えないものです。貫首になって改めて境内を見渡すと、雑然としていて、建築史の本などに見る天平時代の整然とした興福寺の姿とはあまりにも落差がある。「天平回帰」を目指すならば、最も中心となる中金堂を再建しないといけない。その思いが今回の事業の原動力になりました。

中金堂は律令制を形成され、藤原氏の基礎を築いた藤原不比等公が建てられたお堂です。再建は推定ではなく史料に基づいたもので、基本設計をしてくださった建築史の鈴木嘉吉先生も「私たちが造るのは、まさに天平の創建当初の建造物である」と、自信をもっておっしゃいます。平成の礎石の下に保護された天平の礎石、その上に焼けては建て、焼けては建てして造り続けられてきた中金堂…。それを継承できたことが嬉しいですね。

―法相柱も復興されました。

法相柱は、法相宗の祖師14人を描いた柱です。（16ページ）こうした柱があったことはわかっていましたが、当初は計画にありませんでした。しかしあるとき『造興福寺記』という記録を読み返してみましたら、内陣に入って西の第一柱を法相柱といい、最初の火事で再建したときに法相柱も復興したことが書かれていたんです。別の史料には3度目の焼失時も再興したとあります。

―いよいよ落慶目前です。

平成元年に貫首に就任して、翌年ぐらいから大工の棟梁さんと再建について相談をはじめました。あれから四半世紀を過ぎ、ようやく第1期整備事業のなかの眼目である、300年ぶりの中金堂再建が成ります。奈良時代の基壇の上に建つとはいえ、建物は現代の建物であり、建設は完全なる宗教行為です。奈良県や奈良市のご指導をいただき、研究者や専門家の方々のご意見を頂戴しつつ、さらに全国の方々のお力に支えられて、興福寺自前の事業としてここまできたことに感慨を覚えますね。実りの秋になりそうです。

―回廊、南大門の基壇整備…、境内が整然としてきました。

いまでは想像しづらいと思いますが、興福寺の境内は昭和50年代前半までは畠く鬱蒼としていました。幕末に奈良奉行の川路聖謨が将来の民のためにと桜や楓を植えられた伝統もあったのでしょうが、明治期の廃仏毀釈以降、興福寺境内地は奈良公園に取り込まれ、松や桜などが密植されていきます。それは昭和になっても同じで公園的景観が勝ち過ぎ、中金堂一帯も森のようでしたね。笑い話のような話ですが、五重塔のところから参拝客の方が南円堂を指さしてこうおっしゃいました。「この五重塔は興福寺ですか。あれは何という寺ですか」。間に木があって、違うお寺に思えるほどだったんですね。逆に南円堂から五重塔を見ても塔の全容が見えず、4層や5層の甍だけが見える、そんな感じでした。境内をスカッと見通せなかったんです。また桜の木が多かったので、春先には新聞紙と一升瓶を手に花見客がどっと押し寄せるのが恒例でした。

昭和50年代後半になってようやく遺正な公園管理が行われ、奈良公園も明るくなりましたが、本来境内にはあまり木は植えないものです。貫首になって改めて境内を見渡すと、雑然としていて、建築史の本などに見る天平時代の整然とした興福寺の姿とはあまりにも落差がある。「天平回帰」を目指すならば、最も中心となる中金堂を再建しないといけない。その思いが今回の事業の原動力になりました。

中金堂は律令制を形成され、藤原氏の基礎を築いた藤原不比等公が建てられたお堂です。再建は推定ではなく史料に基づいたもので、基本設計をしてくださった建築史の鈴木嘉吉先生も「私たちが造るのは、まさに天平の創建当初の建造物である」と、自信をもっておっしゃいます。平成の礎石の下に保護された天平の礎石、その上に焼けては建て、焼けては建てして造り続けられてきた中金堂…。それを継承できたことが嬉しいですね。

―法相柱も復興されました。

法相柱は、法相宗の祖師14人を描いた柱です。（16ページ）こうした柱があったことはわかっていましたが、当初は計画にありませんでした。しかしあるとき『造興福寺記』という記録を読み返してみましたら、内陣に入って西の第一柱を法相柱といい、最初の火事で再建したときに法相柱も復興したことが書かれていたんです。別の史料には3度目の焼失時も再興したとあります。

―いよいよ落慶目前です。

平成元年に貫首に就任して、翌年ぐらいから大工の棟梁さんと再建について相談をはじめました。あれから四半世紀を過ぎ、ようやく第1期整備事業のなかの眼目である、300年ぶりの中金堂再建が成ります。奈良時代の基壇の上に建つとはいえ、建物は現代の建物であり、建設は完全なる宗教行為です。奈良県や奈良市のご指導をいただき、研究者や専門家の方々のご意見を頂戴しつつ、さらに全国の方々のお力に支えられて、興福寺自前の事業としてここまできたことに感慨を覚えますね。実りの秋になりそうです。

―回廊、南大門の基壇整備…、境内が整然としてきました。

いまでは想像しづらいと思いますが、興福寺の境内は昭和50年代前半までは畠く鬱蒼としていました。幕末に奈良奉行の川路聖謨が将来の民のためにと桜や楓を植えられた伝統もあったのでしょうが、明治期の廃仏毀釈以降、興福寺境内地は奈良公園に取り込まれ、松や桜などが密植されていきます。それは昭和になっても同じで公園的景観が勝ち過ぎ、中金堂一帯も森のようでしたね。笑い話のような話ですが、五重塔のところから参拝客の方が南円堂を指さしてこうおっしゃいました。「この五重塔は興福寺ですか。あれは何という寺ですか」。間に木があって、違うお寺に思えるほどだったんですね。逆に南円堂から五重塔を見ても塔の全容が見えず、4層や5層の甍だけが見える、そんな感じでした。境内をスカッと見通せなかったんです。また桜の木が多かったので、春先には新聞紙と一升瓶を手に花見客がどっと押し寄せるのが恒例でした。

昭和50年代後半になってようやく遺正な公園管理が行われ、奈良公園も明るくなりましたが、本来境内にはあまり木は植えないものです。貫首になって改めて境内を見渡すと、雑然としていて、建築史の本などに見る天平時代の整然とした興福寺の姿とはあまりにも落差がある。「天平回帰」を目指すならば、最も中心となる中金堂を再建しないといけない。その思いが今回の事業の原動力になりました。

中金堂は律令制を形成され、藤原氏の基礎を築いた藤原不比等公が建てられたお堂です。再建は推定ではなく史料に基づいたもので、基本設計をしてくださった建築史の鈴木嘉吉先生も「私たちが造るのは、まさに天平の創建当初の建造物である」と、自信をもっておっしゃいます。平成の礎石の下に保護された天平の礎石、その上に焼けては建て、焼けては建てして造り続けられてきた中金堂…。それを継承できたことが嬉しいですね。

―法相柱も復興されました。

法相柱は、法相宗の祖師14人を描いた柱です。（16ページ）こうした柱があったことはわかっていましたが、当初は計画にありませんでした。しかしあるとき『造興福寺記』という記録を読み返してみましたら、内陣に入って西の第一柱を法相柱といい、最初の火事で再建したときに法相柱も復興したことが書かれていたんです。別の史料には3度目の焼失時も再興したとあります。

した。4度目となる治承4年（1180）の焼失時以降は法相柱の記録は見えなくなるのですが、それまではしっかり受け継がれていたんですね。これは復興すべきだと―。法相宗は祖師を仰ぐ気持ちが非常に強い宗派で、法相曼荼羅のような系譜的な絵画も数多く描かれてきました。また法相の教えはかつては広く学ばれ、興福寺はその中心でした。柱は興福寺が法相寺院の中心であることのある種のデモンストレーションであり、またシンボルでもあったのです。

今回はインド、中国、日本の代表的なお祖師様を、非常に難しかったのですが14名、選ばせていただきました。インドは無著・世親菩薩にはじまり護法論師、戒賢論師、中国は玄奘三蔵、慈恩大師、潙陽大師、日本は道唐の学僧玄昉僧正や秋篠寺を開いた善珠僧正、興福寺第3世別当行賀、真興上綱、平安末期の学匠雅縁別当蔵俊、法相宗中興の祖である解脱上人貞慶です。昔は柱に直接絵師が描いたのですが、今回は日本画家の品中光京画伯にお願いし、別の紙に描いていただいて柱に貼りつけました。

参拝の方にメッセージを。

「天平回帰」と申し上げましたが、天平の時代性とは「典雅」「端正」「剛勁」の3つかと思います。阿修羅に代表される天平の乾漆群像は「典雅」で品がいいですね。「天平写経」などは実に「端正」な文字です。一方光明皇后の『楽毅論』は男勝りで、「剛勁」です。五重塔も中に入ると木組みが力強く、天平の時代精神が表われていると思います。

かたや平成の時代は、のっぺりとして掴みどころがない。もっときりっとした日常生活を送りたいと思ったなら、興福寺境内を歩き、天平のよさを感じていただきたいですね。奇しくも今回の事業は平成にはじまり、平成のうちに第1段階の目標を達成することになりました。まだまだ計画段階ではありますが、中門の復興や五重塔修理など次の目標もあります。次代へ向かうにあたり、平成の興福寺の姿をぜひ目に留めていただければと思います。

多川俊映

たがわしゅんえい

1947年、奈良県生まれ。法相宗大本山興福寺貫首。著書に『興福寺仏像のひみつ』（奈良興福寺中金堂落慶記念）、『朝日選書』共著）、『仏像 みる・みられる』（角川学芸出版）、『唯識とはなにか』（唯識三十頌を読む）（角川ソフィア文庫）、『唯識入門』（春秋社）、『合掌の力タチ』（平凡社）ほか多数。